

研究紀要

〔55〕

令和5年3月

大阪府立中央聴覚支援学校

目次

- | | | | |
|----|-----------------------------------------------------------|---|-------|
| 1. | 校内研究会報告
2022年度 校内研究について
「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション」 | … | 研 究 部 |
| 2. | リフレクションをとおして考える幼児への関わり方
～自立活動の観点をふまえて～ | … | 幼 稚 部 |
| 3. | 「聴覚障がい教育の専門性向上を目指したリフレクション
～小学部での取り組み～」 | … | 小 学 部 |
| 4. | きこえない・きこえにくい子どもの見え方、感じ方に
基づいた授業リフレクション | … | 中 学 部 |
| 5. | かるた大会 これまでの取り組みと今年度の実践報告 | … | 高 等 部 |
| 6. | こころとからだを育てる実践
～2年間の研修と実践のリフレクション～ | … | 寄 宿 舎 |

※本紀要の用字・用語につきましては、「教育要領」「学習指導要領」を基本とし、大阪府やろう教育特有の表記を織り交ぜたものとなっており、報告により異なっていることがあります。

研究テーマ 「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション」

1. テーマ設定の理由

聴覚支援学校の場合、手話などを身につけ、子どもたちとコミュニケーションが取れるようになることが教員として仕事をしていくための前提となる。こうした技術を身につけた頃に、異動で聴覚支援学校を去ることになれば、聴覚障がい教育の専門性の高い教員が残らない。この他にも多くの専門的な知識や技術があり、それを経験豊かな教員から学んでいくOJT（オンザジョブトレーニング）が大切であるが、そうした経験豊かな教員のいない聴覚支援学校も増えつつある。本校も教員の異動が多く、10年以上勤務している教員は少数であることから聴覚障がい教育の専門性向上が課題である。

そこで、各学部においてはあえて自分の考え方や行動にスポットを当て、客観的に振り返る（リフレクション・内省）ことで成功や失敗も含めて多くの知見が得られると考えた。

上記のことを踏まえ、2022年度～2024年度の3年間で「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション」を研究テーマに据え、研究を進めていきたい。

研究を進めるにあたり、ICT機器を活用した教員の保育や授業リフレクション、参観者と授業者が1対1で行う対話リフレクション、多くの教員が参加する集団リフレクションなどを行うことで改善策を明らかにし、一人一人が意識して聴覚障がい教育の専門性向上の研究に取り組んでいく。

2. 校内研究会 報告

1. 日時 令和4年8月22日（月） 10:00～12:00

講師 上越教育大学 大学院 学校教育研究科
坂口 嘉菜（さかぐち かな）氏

(1) テーマ 聴覚障がい教育とICTの在り方

(2) 要約

新型コロナウイルス感染症拡大のため、会場を分散しオンラインにて研究会を行った。

「教育におけるICTのよさとは何か?」「なぜ教育現場でICTを活用するのか?」という坂口氏からの問いかけから始まり、聴覚支援学校ならではのICT活用とは何なのか、聴覚支援学校の課題などについてわかりやすくご講演いただいた。

ICT活用については「それ自体が目的となつては意味がない」「ICTはあくまでも方法であり、目的を達成するための方法の一部である」ことをお話しいただいた。ICT活用で思考の手がかりを見えるところに示すなど板書に思考の過程を残しておくことも大切であることを学んだ。

また、聴覚支援学校ならではのICT活用についてデジタル教科書の例が挙げられた。読んでいる箇所、根拠となる箇所を視覚的に共有しやすいなど全国の聴覚支援学校で活用されている。

そして、実際に活用されているICT教材についてもご紹介いただいた。例えば、テストコンテンツ作成ソフト THiNQXe（クロスィ）は、自分は何が苦手なのかを知り、必要なものを自分で選び学ぶことができる。「つくるんです」「まなぶんです」「のこるんです」（大阪教育大学）は、文字、画像、音声などの教材を自作することができる。

最後に坂口氏より聴覚支援学校ならではのICT活用について、まず機器に触るところから積極的にトライしてみたいとお話しいただいた。全校職員でICT活用の在り方について確認できたことは非常に有益であった。

リフレクションをとおして考える幼児への関わり方
～自立活動の観点をふまえて～

幼稚部

1 目的

近年、リフレクションということばが人材育成の場面でよく使われている。リフレクションとは「内省」という意味があり、人材育成の分野においては個人が日々の業務や現場からいったん離れて自分の積んだ経験を「振り返る」こととされている（人事労務用語辞典, 2011）。保育所保育指針解説（2018）には「保育士は、毎日の保育実践とその振り返りの中で、専門性を向上させていくことが求められる。」と記載されている。また保育所における自己評価ガイドライン（2020）では「保育の振り返りを通じて、子どもの生活や育ちの実態を改めて把握するとともに、「子どもにとってどうだったのか」という視座から保育を捉え直し、それをもとに保育の改善・充実を図っていくという循環が、日常的な保育の過程として常に繰り返されることに意味があります。」と述べられている。これらのことから、日々幼児と関わる私たち教員は、保育のリフレクションを行い、質の高い保育をめざすことが重要であると考えます。また、聴覚に障がいがある幼児を取り巻く環境の変化として、医療技術の進展により聴覚障がいがあることの早期発見、乳幼児期から人工内耳を装着する子どもの増加、補聴器や補聴援助システム等が発展したことや保護者の教育観の多様化がある（岩田、2012）と考えられている。これらの変化を捉え、子ども一人ひとりがこれからの社会を生き抜いていくための力を培うことができる保育を展開していくために、聴覚障がい教育における自立活動に焦点を当てたリフレクションをとおして子どもの見方や保育への考え方を検討していく。

2 方法と内容

2つの取り組みから保育のリフレクションを行った。

(1) 幼稚部内での勉強会を実施

教育基本法（平成18年法律第25号）第9条において「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」と明記されている。このことから教員は日々学び続ける必要があると考える。

本校の幼稚部では、毎年教員同士で学び合える場として1回30分の勉強会を年間10回程度行っている。また内容によっては他学部の参加も呼び掛けている。今年度は表1に示している勉強会の内容で実施をした。

表1 「令和4年度 幼稚部勉強会の実施内容」

内容
「幼児期の発達から考えられることとは」
「検査キットから見る子どもの発達について」
「壁面って何？①」
「壁面って何？②」
「絵画から見る子どもの発達①」
「絵画から見る子どもの発達②」
「幼稚部教育の専門性」
「幼児期における発音指導について①」
「幼児期における発音指導について②」
「発音指導をやってみよう①～母音・パ行・バ行・マ行～」
「発音指導をやってみよう②～タ・テ・ト・カ行～」
「発音指導をやってみよう③～ハ行・サ行～」
「音遊びの聴覚学習」
「きこえの構造と人工内耳」
「地域の小学校に通う聴覚障がいの子どもたちの実際」

今年度の勉強会では教員同士で話し合いができる場を多く設けた。教員同士が対話する中

で自身の指導や支援、子どもの見方のリフレクションを行った。対話を用いたリフレクションについて目黒（2010）は「人から見れば、どんなに些細なことであっても、自分のなかに起きる『気づき』が自分の授業をよりよいものへと変えていくきっかけとなる。」と述べている。このことから他者と対話することは、自分自身を客観的に振り返ることができ、そして「気づき」を次の保育に生かすことができると考える。

例えば自立活動『発音』について学んだ会では、3～4人の少人数グループにわかれ1人が教員役、その他が子ども役となり、実際指導するようにロールプレイを行った。現在の幼稚園では自立活動『発音』の指導は各学年で1人の担当者が行っている。よって実際に『発音』指導の担当ではない教員も、この勉強会では指導するといった形をとった。この勉強会をとおして『発音』指導の担当ではない教員は、指導する際に着目する点や実践をふまえることで見えてきた『発音』指導の大切さに気づくことができた。また実際に『発音』指導を担当している教員は、子どもの見方や指導の仕方を振り返ることができた。

また「地域の小学校に通う聴覚障がいのある子どもたちの実際」を学会では、地域の小学校に通う聴覚障がいのある子どもの現状や課題について学んだ。本校の地域支援専任教諭の坂谷敦子先生を講師として招き、幼稚園を卒業した子どもや地域の幼稚園等から小学校に進学した聴覚障がいのある子どもの現状、地域の小学校の取り組みについて話していただいた。また事前に幼稚園の教員16名からアンケートをとり、その内容についても意見交換を行った。以下の表はアンケート内容をカテゴリ別にまとめたものである。

表2 「7回目 勉強会についてのアンケート内容」

カテゴリ	アンケート内容
地域の学校に通っている子どもについて	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に出た子どもたちはどんな学校生活を送っていますか。 ・地域で育った聴覚障がいのある子ども、支援学校で育った聴覚障がいのある子ども、健聴の子ども、それぞれの実態に違いはありますか。 ・友だちや先生、人間関係はどのような感じですか。 ・社会や理科などの授業（通常の学級で受けている授業）はついていけていますか。 ・困ったことは自ら伝えることができますか。 ・子どもたちから共通して困っていることや子どもたちから受けた相談内容は何ですか。 ・中学校への進路状況はどのような感じですか。
保護の支援について	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者支援で気を付けていることはありますか。 ・保護者が子どもへ行くべきフォローは具体的に何がありますか。 ・保護者にとって地域は魅力的！！そんな保護者に対してどのような話をしたらいいですか。
地域の小学校の現状について	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の学校の受け入れ体制はどのような感じですか？（教員の障がい認識など）
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・選択した学校は子どもたちに合っていると思いますか。 ・幼稚園卒業までに身につけておいた方がいいと思う力は何ですか。 ・支援学校と地域の小学校……それぞれのメリットとデメリットは何ですか。

アンケートは『幼稚園に在籍している子どもに対して、小学生になるまでにどのような力を身につける必要があるか』『その力を身につけるために、私たち教員はどのような関わりや指導支援を行うことが良いのか』『幼稚園の現在の課題について』の3点について振り返ることができる内容であった。またアンケートについて意見交換を行うことで以下の内容をリフレクションすることができた。まずは幼稚園に在籍している子どもが小学生になるまでに身につけておきたい力とは『“きく”態度』『自ら他者とコミュニケーションをすることができる力』ではないかということが考察できた。また、これらの力を身につけるためには、教員は子どもの実態を把握したうえで様々なコミュニケーション手段を身につけさせる必要がある。具体的には手話のみではなく指文字、音声言語、書記日本語の全ての観点を含めた指導

支援をすることが大切であると改めて感じた。この指導支援は子どもたちが小学生になったときや社会に出たときに、自らその場に応じたコミュニケーションを選択できることに繋がると考える。そして子どもたちが就学や就労することを見通して継続した指導支援を行うためには、地域の小学校の現状やその時その時の保護者のニーズを知り、幼稚部の教員間だけではなく、他学部とも協働し続けていくことが今後の課題であると、リフレクションをとおして認識することができた。

目黒(2010)が述べていたように、勉強会で学んだことは日頃の保育に必要な観点であり、参加することで、教員のそれぞれの気づきが保育をよりよいものへと変えていくきっかけとなったのではないかと考える。

(2) 自立活動の観点から子どもの実態を振り返り、指導支援に生かすリフレクションを実施

学校教育法第72条では「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けること」と自立活動について明記されている。また特別支援学校学習指導要領解説自立活動編(2009)には、「個々の生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。」と記されており、自立活動の重要性が示されている。

よって今回は幼稚部の自立活動として位置付けている「発音」「言語」「聴能」の3つから子どもの実態や課題を見る観点として各学年で1つを選んだ。そして選んだ観点を基に、6月～12月の間各学年の子どもの成長や教員の関り、指導支援について振り返り、日頃の保育に生かすための協議を行った。協議を行うために「子どもの様子」「現在の教員の関り方」「期待される子どもの姿」「今後行っていきたい教員の関り方」という共通の視点を設定した。そして幼稚部全体で情報共有を行うために協議した内容を9月に中間報告、12月に最終報告という形で発表を行った。

ここでは、各学年の協議内容から6カ月の中で変化した点に着目し、考察した。

まずは早期教育相談の協議内容である。早期教育相談は3つの観点から「言語」を選んだ。選んだ理由としては、それぞれの子どもの成長段階を整理しながら、コミュニケーションの基礎を育てるにはどうすればよいのかを考察することで、保育の質の向上に繋がると考えたためである。また早期教育相談はある一人の子どもに着目し、リフレクションを行った。リフレクションするなかで、変化した点として2点考えられた。1点目は「子どもの様子」である。リフレクションを始めたころは、子どもが興味ある乗り物のおもちゃを使って遊び、自分の世界を楽しむ姿が多く見られていた。また絵カードを見て、体操することを理解し、好きな動きのときに参加する様子が見られた。しかし6カ月後の「子どもの様子」には、好きな乗り物のおもちゃ以外にも興味を示すことがあったり、好きな体操の曲がかかると嬉しそう表情を浮かべたり、振り付けを覚え、自らしようとしていたりしている様子が見られた。これらの「子どもの様子」は「今後行っていきたい教員の関わり方」を考察し、実際に子どもと関わっていったことが変化の理由として考えられる。リフレクションを始めたころは、視覚的支援(実物やカードなど)を保育の中で使用するといった関わりが主に行われていたように感じる。しかし、6カ月後には、視覚的支援を明確化し、また子どもの好きな音楽を保育に取り入れ、場面の切り替え時に合図として活用していた。このような関わりを行ったことで、子どもは見通しをもち、安心して活動に取り組めるようになったのではと考える。

次に3歳児の協議内容である。3歳児は「言語」を観点として選んだ。選んだ理由としては、入学の時点で、手話や音声言語など「ことば」でやりとりできる子どもが少なく、身ぶりや指差し、泣くなどの行動で要求を伝えることが多かったため、まず、伝え合う力をつけるために語彙を増やすことが課題と考えたからである。リフレクションを始めたころは伝えたいことや要求は身振り手振り、泣くなどの行動で表していた。そこで語彙を増やすために3歳児のクラスを担当する教員は絵カードを用意し、学年全員の教員が共通した指導支援を行うことをめざした。また家庭での親子の関わりにも重点を置き、その日に経験したことをプリントにして毎日配付を行い、親子での会話の手がかりとなる取り組みも行った。獲得した語彙を活用し、簡単なやりとりをできるようになってほしいと考えた。子どもがやりとりできるように、教員が見本を示すことを心がけていった。そうすることで、身近なものや場所の名前を覚え、少しずつ友だちに関わりにいこうとする様子が見られるようになってきた。このことから、「言語」という観点であっても“話す”という行動を主として考えた指導支援だけではなく、“見る”“きく”といったことも大切に捉えた指導支援を行うことが必要であ

ると感じる。

続いて4歳児の協議内容である。4歳児は「発音」を観点にしてリフレクションを行った。「発音」を選んだ理由として、発音は個々によって実態や課題が様々であり、自立活動の時間だけではなく、日常的に繰り返し意識しながら取り組むことで身につくものであると考えたからである。リフレクションを始めたころは、それぞれの子どもが使用しているコミュニケーション手段のみでの会話が多かった。例としては、音声言語を主に使用している子どもは指文字が曖昧であったり、手話を主に使用している子どもは音声を出す様子が少なかったりするといったことである。このような「子どもの様子」を考慮し、全ての子どもが自然と声を出すようになっていたり、音声言語のみではなく手話や指文字も活用するようになってきたり、日々の保育の中でも様々なコミュニケーション手段を教員が意識して使用するようになった。また「発音」としての指導だけではなく、体作りのために外遊びの機会を増やしたり、口をしっかりと動かすために給食時によく噛んで食べるように促したりするよう変えていった。そうすることで、コミュニケーションの際に声を出すようになってきたり、音韻に気をつけて語彙を獲得し、口形を意識して話そうとするようになってきたりしている。また友だちとの関わりも増え、“話す”“きく”“見る”という行動を意識しながら取り組んでいるように感じる。このことから日々の保育内容も自立活動に繋がるのではないかと考える。

最後に5歳児の協議内容である。5歳児は「言語」を選択した。選んだ理由としては、少人数で重複障がいがある子どもが多いクラスであり、子どもの言語面を含めた総合的な発達・成長の過程と担任の関わりを考察できると考えたからである。リフレクションを始めたときの「子どもの様子」は、一方的に自分の思いを伝えようとする気持ちが強かったり、様々な物事に興味を示したりする様子が多かった。5歳児の教員は、子どもたちが主役となった絵本を作成し、その中で生活に即したことを扱いながら指導支援をしていた。また、他者との関わりを増やしてほしいという教員の思いから、今までの関わりや指導支援を継続しながら子どもと同じ目線に立ち、何に興味があり、何を見ているのかを子どもとともに考えられるような関わりを大事にした。そうしたことで、クラスの友だちがする行動や今見えている事柄や情景に興味を示すようになった。このことから子どものその時その時の状態に応じた指導支援をしていくことと、継続した指導支援をしていくことの2つを両立しながら保育を展開していくことが大切であると考えた。

3 考察とまとめ

今回、自立活動の観点をふまえたうえで日ごろの私たち教員の関わりや子どもの様子についてリフレクションを行うことができた。リフレクションを行うことで、3つのことについて考察することができた。

1点目は、子どものその時その時の状況や実態に応じて教員の関わり方を振り返り、その都度修正したり変化したりしていくことが重要であることがわかった。各学年のリフレクションの中で教員の関わりについて試行錯誤している様子があった。継続していく指導支援もあれば、子どもの成長に応じて発展させた関わりをしているものもあった。私たち教員がどのように関わり、指導支援していくのかを言語化することは、教員一人ひとりの考えや思いが明確化し、子どもにとってより具体的な指導支援をしていくことに繋がると感じる。今後も子どもの指導支援を振り返り、その時の課題や疑問に向き合っていくしながら、子どもの成長に関わっていきたい。

2点目は、自立活動は日々の保育と繋がりがあり、全ての教員が自立活動の観点をふまえながら子どもの実態を把握する必要があるということである。特に幼児期においては生活や遊びのなかで、自立活動の観点をふまえた関わりをすることが子どもにとっての成長に大きな影響を与えると考える。リフレクションのなかで“見る”“きく”“話す”といった行動を促すための指導支援や、体づくり、給食指導など一見自立活動とは関係ないと捉えられるものも、大きく関わっていることがわかった。日々の保育に自立活動が関わるということは、自立活動の担当者だけでなく、子どもと関わる全ての教員が自立活動の観点到意していくことが大切であると考えた。そのために今後も引き続き、教員全体で自立活動について学ぶ機会を設け、リフレクションを行っていく必要があると感じる。

最後、3点目は教員同士で情報共有、意見交換を行うことが重要であるということである。今回

各学年のリフレクションだけではなく、中間報告、最終報告という形で全体に共有する場を設けた。全体共有をすることで、子どもたちのことを知るだけでなく、私たち教員の子どもの関わりや指導支援の幅を広げることができる。そして一貫性のある保育に繋がると考える。

今回のリフレクションは、自分自身を振り返り、次への取り組みに繋げるきっかけとなったのではないかと考える。しかし日ごろの子どもへの関わりや指導支援について自立活動の観点をふまえて着目したため、様々な保育のなかで子どもにとってどのような指導支援が自立活動につながるのかが明確になっていない。今後は日々の保育の中に自立活動の観点をどのように折り込んでいくのかを考え、リフレクションをとおしてより良い保育を展開していき、子どもの成長に繋げていきたい。

引用文献

岩田吉生(2012) 聴覚障害児の教育環境における課題 一ろう学校および通常の学校での教育環境一. 愛知教育大学研究報告 教育科学編. 6. 19-25

目黒悟 (2010) 「看護教育を拓く授業リフレクションを教える人の学びと成長」, メヂカルフレンド社

「聴覚障がい教育の専門性向上を目指したリフレクション

～小学部での取り組み～」

小学部

1 はじめに

聴覚支援学校では児童の実態が多様化しており、それに応じた支援や指導を行う適性教育が求められる。そのため、手話や視覚的支援など、聴覚障がい教育における専門的な技術も必要となってくる。この分野で指導力の高い教員となるためには、専門的な知識や技能の習得と教育現場での実践が必要になってくる。

近年においては、小学部でも ICT 機器を活用して作成した指導教材が多い。しかし、個人で作成することが多く、他の教員がそれを活用することは教材の意図や目的、使用方法を共有することに課題が残る。

そこで、今年度は専門性の向上、および継承に向けて、以下の活動に取り組んだ。

① チェックリスト（資料1）を活用した指導技術の向上

② ALACT モデル¹⁾を活用したリフレクション

上記の①～②を行うことにより、聴覚障がい教育の専門性の継承、およびリフレクションが行われ、その結果、教員の資質向上へとつながると考え、下記の通り研究活動を進めた。

2 研究活動の概要

(1) チェックリストを活用した指導技術の向上

初任者研修や年次研修で研究授業を行う教員は、昨年度まで使用していた聴覚障がいの専門性チェックリスト（アドバイスシート）をもとに、自身で研究授業の振り返りを行った。また、そのチェックリストの集約を行い小学部教員の中で共有した。

(2) ALACT モデルを活用したリフレクション

ALACT モデルとは、コルトハーヘン（1985）が提唱した、学習者の理想的な行為と省察のプロセスを 5 つの局面に表したものである。この中にある「8 つの問い」の枠組みを活用²⁾して教員のリフレクションを行った。また、学習会ではファシリテーターと発表者、意見者の役割を決めた。発表者は 8 つの問いに基づいて自身の教材を客観的に振り返って発表してもらった。意見者は、発表者自身が課題に気づくことができるような問いかけを行い、ファシリテーターは話し合いの場を導く役割を担って進めるようにした。

(3) 授業後の振り返り

今年度の研究授業者は初任者研修 1 名、インターミディエイトセミナー1 名、アドバンスセミナー1 名、10 年次研修 1 名の合計 4 名であった。討議会については、初任者研修の対象者のみ討議会を設け、討議会には参観者は全員参加とした。討議会参加者全員に意見やアドバイスを伝えてもらうことで、授業者だけでなく参加者一人ひとりが研究授業について日頃の授業と結びつけながら意見交換することができる場となった。また、初任研以外の研究授業者は、アドバイスシートの内容をもとに振り返りシートを記入し、今後の課題等について振り返る機会を設けた。

(4) 学習会

小学部全員が参加する学習会を二回企画した。内容は次の通りである。

○第一回

- | | |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 日時 | 令和 4 年 7 月 22 日（金）10：00～12：00 |
| 2. 内容 | ① グループに分かれて作成した ICT 教材を紹介。（どのような背景、意図があってその教材を作成したのか、特に留意した点について報告）
② 使ってみて、児童の反応はどうだったのか。（ビデオ）
③ 同じグループ内でディスカッションを行い、よい点、どう改善すれば良くなるのかを話し合う。
④ 話し合いで学んだことについてグループ内でまとめる。 |

- ⑤ 全体で集まり、本日の話し合いの内容を発表する。

○第二回

1. 日時 令和5年1月11日(水) 15:00~17:00
2. 内容
- ① グループに分かれ、第一回学習会を受けて改善した点について発表する。
 - ② ディスカッションを行い、よい点、どう改善すれば良くなるのかを話し合う。
 - ③ 話し合いで学んだことについてグループ内でまとめる。
 - ④ 全体で集まり、本日の話し合いの内容を発表する。

※第二回は諸事情により中止。

3 研究活動の成果と課題

(1) チェックリストを活用した指導技術の向上

昨年度に引き続き、チェックリストを活用して年次研修(初任者研修、インターミディエイトセミナー、アドバンストセミナー)の研究授業を実施した。聴覚障がい教育の専門性についての観点が明記されていることにより、授業者は授業を組み立てる際の参考資料となり、参観者は授業のどこに着目すべきかが明確になったと考える。来年度についてもチェックリストの活用を推進したい。また、全ての研究授業者のビデオ撮影を行い、それを活用した討議会を行うことで、さらなる聴覚障がい教育の専門性の向上を期待したい。

(2) ALACT モデルを活用したリフレクション

今年度はALACTモデルを活用した教員の専門性のリフレクションを実施した。教材の発表者が8つの問いの視点から教材について分析し、さらに児童目線による他教員の意見をきいて自ら改善点に気づくことで、授業改善の手がかりとすることができるのが目的であった。そのため、第一回学習会に先立ってALACTモデルについて学ぶ学習会を実施し、学習会では参加者は改善点をそのまま述べるのではなく、発表者から改善点に気づくことができるような話し方で進めることを確認した。

学習会では、作成した教材を活用してリフレクションを行った。スライドに様々な視覚情報があり、児童目線になった意見を伝えることで、発表者自身が改善点に気づき、教材を改善して今後の授業に生かすことができた。また、学習会後のアンケートでは「児童の視点から教材を考えることができた」「1つの教材を複数の教員間で共有して様々な視点での意見をきくことができた」という意見が多くあった。このように、ALACTモデルの8つの問いを活用することで、児童視点で教材のリフレクションを実施して改善することができた。

しかし、研究部からポイントをきちんと説明できていなかったり、解釈の相違や研究部員の説明不足であったりしたことから、学習会ではファシリテーターなどの役割を担う教員がALACTモデルを上手く活用できずに進めてしまったグループもあったため、学習会においてALACTモデルを活用してリフレクションを実施する目的は達成できなかった。そのため、リフレクションの手段をALACTモデルに限定して活用するのではなく、様々な側面からのアプローチをしていくことが必要であると考えた。

児童の実態が多様化し、それに応じた支援や指導を行う適性教育が必要となる聴覚障がい教育の専門性の向上では、様々な教員の視点の共有が必要である。今回取り入れた対話型校内研修について、小澤浩太郎³⁾は「先生方お互いのためになる実践とは、普段の授業の中でどのような配慮がなされているかという、毎日続けられることの中にある。普段の授業の姿を知ることが、まさに研修である。」とあると述べている。様々な教員の授業、生活の中での児童への言葉かけの方法、授業展開のパターンや流れなどをしっかり共有することにより、専門性の継承ができるのではないかと考える。また、上條春夫⁴⁾は授業の良し悪しを分析するのではなく、授業の中で気づいた児童との関わり方や授業の仕掛けについて話す必要性を述べている。そのため、研究授業の討議会や学習会でも、リフレクションを通して情報共有する場があることで、専門性向上へつながると考える。来年度の研究活動ではリフレクションの手段としてALACTモデルに限定する

のではなく、より具体的な方法を模索したい。

引用文献

- (1) 荒木寿友. (2015). 『教員養成におけるリフレクション: 自身の「在り方」をも探究できる教師の育成に向けて』. 立命館教職教育研究= 立命館教職教育研究, 2, 5-14.
- (2) 関原. (2021). 『コルトハーヘン「8つの問い」を活用した授業改善: 中学校英語教師の授業実践を通して』. 富山大学人間発達科学部紀要= Memoirs of the Faculty of Human Development University of Toyama, 15(2), 143-157.
- (3) 小澤浩太郎, & 小野瀬善行. (2020). 情報共有による小学校の教職員の関係性向上に関する研究—対話型組織開発の視点を踏まえて—. 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, (7), 265-271.
- (4) 上條春夫 編. (2021). 『リフレクションを学ぶ! リフレクションで学ぶ!』. 学事出版, [「協働的な授業リフレクション」の理論と実践書], 127

資料1

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシート

年 月 日 曜日 時間目 教科 () 指導者 ()

評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

項目	内容	評価	アドバイス (気づいたこと)
基礎的 授業に おける 環境 整備	1 児童は、授業の準備(教科書など)ができています。		
	2 安心して授業に集中できる雰囲気がある。		
	3 必要のない情報が目に入らないように工夫している。		
	4 私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		
	5 事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		
	6 互いの顔が見えるような机の配置になっている。		
基礎的 な 指導 技術	1 指導案が適切に作成されている。		
	2 板書をわかりやすく工夫している。		
	3 考えを発表したり書いたりする場面を設定している。		
	4 教材やワークシートを適切に活用している。		
	5 単元名が提示されている。		
	6 めあて(目標)を提示している。		
	7 色分けしたりして、見てわかる板書になっている。		
	8 視覚的教材を活用している。		
	9 導入を工夫している。		
	10 話す速さが適切である。		
	11 明確でわかりやすい指示や説明をしている。		
	12 書かせるとき、話すときを区別できている。		
	13 児童の注目を集めてから話し始めている。		
	14 座り方や書き方の指導ができています。		
	15 児童に顔や口元が見えるようにしている。		
	16 児童に伝わりやすい方法(手話、指文字、音声など)で表現している。		
	17 児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。		
	18 考えを発表したり書いたりする場面を有効に活用している。		
	19 児童が本時で学んだことを、自分のことばでまとめている。		
	20 児童がめあてを達成している		
ティ ー グ ー チ ム	1 授業の流れを把握し、次の活動が円滑に進むようサポートをしている。		
	2 児童に、指導者を見るよう促している。		
	3 必要なときに児童の指導助言をしている。		
発 展 的 な 指 導 技 術	1 児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。		
	2 授業の流れがわかるような工夫をしている。		
	3 時間配分がうまくできている。		
	4 教員が授業づくりに関して大切にしていることがある。		
その他			

記入者()

きこえない・きこえにくい子どもの見え方、感じ方に基づいた授業リフレクション

中学部

1 はじめに

平成30年度より4年間において「主体的・対話的で深い学びの実現」に係る研究を行ってきた。生徒が自ら考え、創造する力を育むために、教科や学年縦割り活動において話し合い活動や発表等を進めていくことが重要だとわかった。本年度より、本校において研究テーマを「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション」と設定した。中学部では、今後長期にわたって、生徒一人ひとりの見え方、感じ方を教員自身が振り返るとともに、生徒も「本当にわかったのか」「わからないときにどう行動するか」を振り返り、よくわかる授業へとつなげていきたい。

具体的には、子どもの「視覚的な認知」に注目し、それに基づく授業リフレクションを研究テーマとして進めることにする。きこえない・きこえにくい子どもにとって、視覚的な情報は重要であり、どのように手話表現や教材、板書・スライドを工夫するかがよりわかりやすい授業につながると考える。学部内研修及び授業公開、リフレクションシートを通して、子どもにとってわかりやすい手話表現、教材提示、板書・スライドになっているかを振り返り、私たち教員の授業省察の足がかりとしていきたい。

2 研究活動—成果と課題

(1) 学部内研修

まずは「視覚的な認知」とは何か、教員がどのように授業を振り返ればいいのかを学ぶために、学部内研修を下記のとおり実施した。

「子ども・教員は授業中どこを見ているの？—わかりやすい授業をめざして」

日 時 令和4年10月14日（金）16:00～17:00

形 式 講義及びグループワーク

講 師 同志社大学 免許資格課程センター 教授 中瀬浩一 先生

当日は、学部外の教員も参加可能とし、合計14名の参加があった。内容としては以下のとおりである。なお、参加できなかった教員には、資料の配付及び撮影したビデオの案内を行い、できるだけ中学部教員全員が同じ内容を共有できるように努めた。

〈ねらい〉

本研修では、長らくきこえない・きこえにくい子どもの授業づくりに関わってこられ、また授業者の視線行動の分析・研究を進めてこられた中瀬浩一教授をお招きし、特徴的な動作や視線等に関する気づきを中心に講演していただき、私たち教員の授業省察の足がかりとすることをめざした。

具体的には、視線行動に関する研究結果及びきこえない子どもにとってわかりやすい授業づくりのポイントを講義いただき、講義のなかで参加教員がグループにわかれ話し合いながら日ごろの授業を振り返ることを研修の目的とした。

〈講義概要〉

中瀬氏は、近年「アイトラッキング装置」といわれるゴーグル型の眼球運動測定装置を用いた教員の視線行動に関する研究を進めてこられた。今回は、教員経験が1年め、2年め、3年めの教員を対象に行った研究結果を参加者全員で分析した。教員がどんなときに、どの子を見ているか、その子どもを見たのはどのような意図があったのか、を振り返るうえで有効な研究である。講義の中で出た例としては、1年めの教員は、一人ひとりを「見て」はいるが、その時間が短く、実質的には「通過している」ことがわかった。他にも、特定の生徒ばかり見ている例もあった。少し慣れてくると、一人ずつを少し長めに見ており、途中で他の生徒にも視線を送ることで、生徒の「見られている」という感覚

をもたせていることも確認できた。その後は、グループにわかれ、3つの視線パターンを比較し、変化の順に並び替えるグループワークを行った。経験を重ねていくと、生徒を見る時間が長くなったり、まんべんなく視線を送るようになったりなど、様々な角度から視線行動の変容について考えることができた。その中で、発問に対して応答した生徒以外にも意図的に視線を送っているか、教科書の音読場面では生徒の姿もとらえながら音読しているかについても意識することが重要であるとお話いただいた。

最後には、事前に集約した参加者からの質問をもとに講義いただいた。まずは、きこえない・きこえにくい子どもにとってわかりやすいスライドの提示の工夫についてである。中瀬氏からは、何より子どもが「見る」時間を確保することが大切だと話があった。「音声をききながらスライドを見る」聴者と異なり、「見る」→「きく」といった各作業の時間を確保することが、きこえない・きこえにくい子どものわかりやすさにつながる。また、他にも、一度に提示する情報量の工夫やアニメーションの使い方、流れ等についても詳しくご教授いただいた。

(2) 授業公開及びリフレクションシート

中学部では、本年度授業公開を2回行った。これらは、「他教科や他教員の優れた授業実践を見て、自身の授業に生かすこと」と「他教科での生徒の様子を見ることで、生徒が「わかりやすい授業」を中学部全体でつくりあげていくこと」を目的とした。見学の際には、研究部で作成したりフレクションシート（資料1参照）を活用し、授業者に還元することで相互に高めあうことをめざした。

【期間】

1学期 令和4年6月14日（火）～6月17日（金）

2学期 令和4年10月24日（月）～10月28日（金）※全校における相互見学を兼ねた

※回答者6名

(4 よくあてはまる 3 ややあてはまる 2 どちらかというにあてはまらない 1 あてはまらない)

1	すべての生徒を見ながら、話すことができている。	66%	17%	17%	0%
2	生徒の実態に即し、興味をもって取り組める教材を選択している。	67%	33%	0%	0%
3	教員は生徒同士の手話が見えるように意識している。	50%	33%	17%	0%
4	生徒に口形や表情、手話が見えるように立ち位置を意識している。	100%	0%	0%	0%
5	授業や活動の流れを視覚的に示している。	20%	40%	40%	0%
6	視覚的な刺激、情報に配慮した環境調整を行っている。	33%	67%	0%	0%
7	生徒の思考に沿って、板書・スライドを効果的に活用している。	50%	50%	0%	0%

気づいた点

- ・【数学】今取り組む問題のみをスライドに写し、何をすべきかがわかりやすい。情報量も多くなると集中しやすい板書の中で生徒が答えることで定着につながると感じた。生徒との会話（雑談も含む）から、その話のつづきは「この課題がおわってから」とやる気・モチベーションが続く工夫がとても勉強になった。
- ・【英語】ASL使ってコミュニケーションをとっている生徒がいたので、ASLを教員も活用すれば視覚的な学習には繋がるのではと思いました。
- ・【社会】ポンチョを実際にもってくるなど、生徒がイメージをもって取り組めるようにされていた。写真はスライド、重要なことは板書と使い分けがわかりやすい。
- ・【社会】生徒がイメージしやすいよう言葉のかけ方を工夫している。スライドは、伝えたいことが多く、かなりボリュームがあるという感じがするので可能ならば1枚ごとの構成をもう少しシンプルにしたら見やすいと思います。

・【社会】フリーのワークシートを使い子どもたちが学びを自分で調整する（学習の仕方）形式は参考になりました。若い先生が人権問題を扱ってくれているのはありがたいし、自分の体験を伝えてくれるのは子どもたちにとっても生きた教材になっていると思います。扱う内容が大切な内容だったので、いつもと違う雰囲気だったのかもしれませんが、そこは照れずに真剣にやり通すことで子どもたちも大切な学習なのだと感じるとのようです。スライドや文言など一人でやるのは難しいこともあるかと思います。教科を超えたり、人権担当に相談して、今後より良いものにしていきましょう。「差別ってなんであかんのか？」村八分の説明を使って、「人から無視されることで命を落とす人もいます。人の命を奪う権利は絶対に許してはならない。」
「では誰が差別しているのか」「なぜ？」と考えさせるのも一つの手です。

※第2回については、全校における相互見学を兼ねているため、省略。

授業公開期間を設けることで、他の授業を見学する機運を高めることができた。ただ、研究部から見学する意図を伝えきれなかったり、授業準備等で他の授業を見学する時間がとれない教員もいたりしたことから、どのように見せ合うかが今後の課題として残った。例として、複数の教員にスポットをあて、その授業の様子を全教員で見て、より良い授業づくりを考え、話し合うといった方法も考えられる。次年度以降、新たな方法を検討していきたい。

3 まとめ

中学部では、以前より電子黒板やテレビモニターを備え付けており、黒板だけではなく ICT 機器を活用した授業づくりを進めている。今年度より中学部において生徒1人1台端末が始まり、授業や総合学習にて生徒がタブレットを活用する場面が増えた（図1参照）。また、令和5年1月より、大阪府学校経営推進費により、中学部の2教室に電子黒板機能付き超短焦点プロジェクターが設置された（図2参照）。今後も各教室に設置される予定である。タッチペンを用いて直接書き込めたり、文章や画像などの同時提示が可能になったりと利点が多くあり、ICT 機器を用いた授業づくりは今後さらに進むと考えられる。その中で、ICT 機器とともに板書や教材を組み合わせ活用し、きこえない・きこえない子どもが目で見えてわかる授業づくりを意識していなければならぬ。

本年度よりテーマを新たに設定し、手探り状態ではあるが、学部内研修を通して、きこえない・きこえない子どもには、「目で見える」情報を十分に確保していかなければならないこと、その活用や提示の方法を考えていくことが大切だと学んだ。次年度以降は、子どもの見え方に注目し、板書や ICT 機器、教材を授業でどのように組み合わせ使用とわかりやすいかを考えあてていきたい。



図1 授業におけるタブレットの活用例

- ① 答えのヒントをQRコードで示し、生徒が各自持っているタブレットで読み取って関連リンクにとべるように工夫。
- ② Google classroomを活用し、授業内の課題を指示。

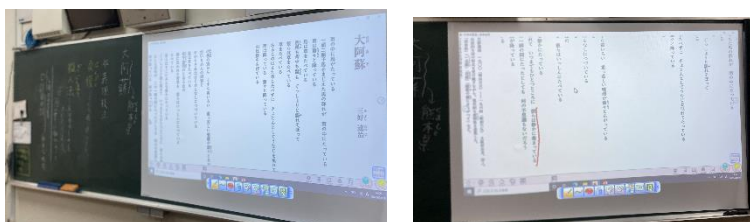


図2 電子黒板機能付き超短焦点プロジェクターを活用した授業の一例

【資料1：R4年度中学部 授業リフレクションシート】

授業リフレクションシート

令和4年度 中央聴覚支援学校 中学部

日時	月	日()	限	教科		授業者	
----	---	------	---	----	--	-----	--

(4 よくあてはまる 3 ややあてはまる 2 どちらかというにあてはまらない 1 あてはまらない)

1	全ての生徒を見ながら、話すことができている。	4	3	2	1
2	生徒の実態に即し、興味をもって取り組める教材を選択している。	4	3	2	1
3	教員は生徒同士の手話が見えるように意識している。	4	3	2	1
4	生徒に口形や表情、手話が見えるように立ち位置を意識している。	4	3	2	1
5	生徒が発言しやすい環境をつくっている。	4	3	2	1
6	ICTや視聴覚教材を効果的に活用している。	4	3	2	1
7	板書、スライドの提示のタイミング、情報量が適切である。	4	3	2	1

(気づいた点など)

--

かるた大会 これまでの取り組みと今年度の実践報告

高等部 国語科

1 はじめに

高等部国語科で令和元年度より毎年1月にかかるた大会を実施するようになり、今年で4年目となった。始めるきっかけとなったのは今年度(令和4年度)から施行された新学習指導要領(国語科)への改訂である。改訂の基本方針に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進とあるが、国語科の中でも特に古典分野は生徒に馴染みがなく、苦手意識を持つ生徒も多い。また、〈新学習指導要領(国語科)4 国語科の内容 (3) 我が国の言語文化に関する事項 ○伝統的な言語文化〉には「古典に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景、必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解したりすることに重点を置いて内容を構成している。」とある。つまりただ古典文法を学習し古文を読解するだけではなく、当時の生活(古典常識)についてもこれまで以上に指導していかなければならないようになった。百人一首に収められた詩歌にはその時代を生きた人の思いが込められている。正月の遊びとして身近な百人一首から古典に触れ、少しでも古典に興味を持ち、主体的に学習に取り組むきっかけになればと思い、かるた大会を計画した。

この実践報告ではこれまでの取り組みの振り返りと、そこでみつかった課題をもとに実践した今年度のかるた大会の実践を報告する。

2 これまでのかるた大会

過去3回かるた大会を実施してきたが、多少の変更はあるものの、基本的な活動内容は変わっていない。これまでのかるた大会を令和元年度の取り組みを参考に紹介する。

(1) 令和元年度(第1回かるた大会)の取り組み

ア 準ずる課程の生徒

(ア) 事前指導

- 12月 授業時にかかるた大会の説明、百人一首のルール確認、練習。
冬休みの宿題に百人一首の内容を出題。

(イ) かるた大会当日

百人一首を実施。4人一組2展開、1試合15分で実施。札は音声だけではなく、PowerPointでも表示した。取った枚数を団活動(高等部の縦割りグループで年間を通してさまざまな取り組みを行う)の点数に反映させた。

イ 生活応用コースの生徒

(ア) 事前指導

- 10月 かるた大会の説明。
授業時にかかるた大会当日使用するいろはかるたの作成を開始。
- 12月 いろはかるた完成。
いろはかるたのルール確認、練習

(イ) かるた大会当日

生徒が作成したいろはかるたを使用し、いろはかるたを実施。音声はなしでホワイトボードにひらがなをゆっくりと書く方法で行った。点数を団活動(高等部の縦割りグループで年間を通してさまざまな取り組みを行う)の点数に反映させた。

ウ 成果と課題(過去3回の内容を含む。)

- ・初めての取り組みであったが、生徒からの評判は良かった。
- ・毎年継続して取り組みを続けることにより、かるた大会が伝統となった。(11月ごろから自主的に百人一首を覚える生徒が出てくる)
- ・これまで行事で目立っていなかった生徒が活躍することがあり、自信をつけさせることができた。

- ・競技としての百人一首には親しむことができたが、当時の歴史背景や文化にまで関心を広げることができていなかった。
- ・準ずる課程と生活応用コースが違う取り組みをしており、全員で取り組む活動がなかった。

3 令和4年度のかるた大会（第4回かるた大会）

(1) 改善した点

- ア ・競技としての百人一首には親しむことができたが、当時の歴史背景や文化にまで関心を広げることができていなかった。
 - (ア) 準ずる課程の生徒の事前指導の際に百人一首の成り立ちや当時の文化・生活についての授業を行った。また、授業で説明した内容をかるた大会当日、クイズとして出題するようにし、百人一首同様、クイズの正解数についても団活動の点数に加算するようにした。
 - (イ) 生活応用コースの生徒に事前指導として正月や日本の伝統的な遊び・行事などについての授業を行った。準ずる過程の生徒同様、授業で説明した内容をかるた大会当日、クイズとして出題するようにし、クイズの正解数についても団活動の点数に加算するようにした。
 - (ウ) 生活応用コースの生徒は事前指導で学習した正月遊び（すごろく・福笑い）を体験できる場を設けた。
- イ ・準ずる課程と生活応用コースが違う取り組みをしており、全員で取り組む活動がなかった。
 - (ア) 事前指導で学習した内容をもとに実施したクイズは準ずる課程・生活応用コース一緒に取り組むことができるようにした。人前で発言することが苦手な生徒でも答えやすく、また、文字での回答が難しい生徒でも答えやすいよう、今回はタブレットで Kahoot!のサービスを活用した。Kahoot!については下記で説明する。
 - (イ) かるた大会当日の最後に全員で輪になって坊主めくりを行った。一番枚数が多かった生徒の枚数を団活動の点数に加算するようにした。

(2) 事前指導

- ア 準ずる課程の生徒
 - 1 1月 授業時にかるた大会の説明。
百人一首の成り立ちや当時の文化・生活についての授業を行う。
 - 1 2月 百人一首のルール確認、練習。
百人一首の成り立ちや当時の文化・生活についての授業を継続して行う。
冬休みの宿題に百人一首の内容を出題。
- イ 生活応用コースの生徒
 - 1 1月 授業時にかるた大会の説明。
日本の伝統的な食べ物や遊び、行事などの授業を行う。
 - 1 2月 正月の文化、干支などについての授業を行う。
百人一首に参加する生徒は百人一首のルール確認、練習。

(3) かるた大会当日

- ア 百人一首・正月クイズ
 - ・団活動のグループに分かれ、生徒全員で行った。
 - ・百人一首関連の問題については全員が、正月関連の問題に関しては生活応用コースの生徒のみが答えられるようにした。
 - ・クイズは Kahoot!のサービスを活用した。
- (ア) Kahoot!について

Kahoot!は、クイズ大会を開けるアプリケーションである。出題者がクイズを作ると、参加コード（ゲーム PIN）が発行される。参加者は、ゲーム PIN を入力することでクイズに参加できる。クイズは基本的に4択問題で、早く答えるほどポイントが多く入る。基本的に Google アカウントがあれば、無料でクイズを作ることができる。また Web ブラウザさえ動けば、アプリをダウンロードしなくても使用可能である。
- イ 百人一首
 - ・準ずる課程の生徒と参加希望の生活応用コースの生徒で行った。

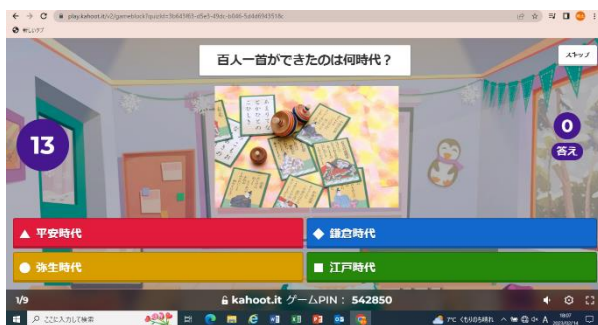
- ・実施方法は令和元年度時と同様。
- ウ 正月あそび
- ・百人一首に参加していない生活応用コースの生徒が参加。
 - ・すごろくと福笑いを体験した。
- エ 全員で坊主めくり
- ・全員で輪になって坊主めくりを行った。

4 取り組みを終えて

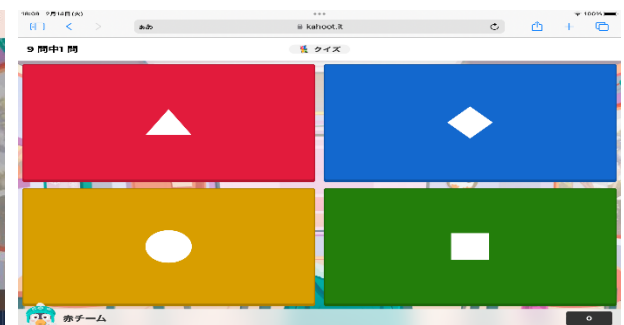
令和4年度も新型コロナウイルス感染症の影響で行事が中止・縮小を余儀なくされることがあった1年であった。現在の高等部3年生の生徒は入学時から新型コロナウイルス感染症の影響を受け、3年間ずっと感染症対策のことを考えて過ごさなければならなかった。そのため国語科として、「百人一首から古典に関心を持ち、主体的に古典を学んでほしい。」という思いだけで、かるた大会を続けてきたのではなく、生徒たちに活動が制限された中で少しでも楽しい学校生活をおくってほしい、その思いもあって、4年間この活動を続けてきた。

3学期に入り、3年生がこの学校で過ごす時間も少なくなってきた。最後のテストが終わり、残りの時間でやりたいことを聞くと、必ず幾人かは「百人一首がしたい。」と答える。そんな生徒たちの姿を見て、大げさかもしれないが、私は「我が国の言語文化は次の世代（生徒）たちに継承された。」と感じた。ほとんどの生徒が自分の好きな歌を一首二首そらんじることができる。いずれ生徒たちの頭の中から古文単語や古典文法は消えてしまうかもしれないが、百人一首をとおして学んだ言い回しや音のリズムはきっとこれからも残っていくだろう。今後も生徒が主体的に国語を学んでいくことができる方法を考え続けていきたい。

(資料1) Kahoot! 電子黒板に表示した画面



(資料2) Kahoot! タブレットに表示した画面



(資料3) 百人一首・正月クイズのようす①



(資料4) 百人一首・正月クイズのようす②



(資料5) 百人一首のようす



(資料6) 正月遊びのようす①



(資料7) 正月遊びのようす②



(資料8) 坊主めくりのようす (枚数の確認中)



「こころとからだを育てる実践～2年間の研修と実践のリフレクション～」

寄宿舎

1 はじめに

寄宿舎では、研究部と舎内の研修担当が連携して寄宿舎内の研修の計画を立てている。今年度は、全校研究テーマ「聴覚障がい教育の専門性の向上をめざしたリフレクション」を受けて、寄宿舎研修テーマを検討し「生活教育の実践を集団で振り返り、深める」と決め、年間計画を作成し、研修を進めてきた。実際の生活で起こった事象について振り返り、グループ討議という少人数集団での対話の中で、舎生を多角的にみる視点を得られるように進めてきた。また講師を招いての研修会では福祉に関する制度・施策の基礎を学ぶ良い機会となった。

日 程	研修運営
4/28 (木)	研修計画及びテーマ・年間計画の確認
6/24 (金)	グループ討議①
8/ 2 (火)	外部講師を招いての研修会
8/26 (金)	研修会参加報告①
11/22 (火)	グループ討議②
1/27 (金)	事例研究会
3/20 (月)	研修総括

2 今回の紀要について

今年度の研究紀要では、全校研究テーマに沿って寄宿舎での専門性の向上をめざしたとりくみについて振り返りまとめてみようと思う。

寄宿舎では実践を振り返る機会としては、舎内研修だけでなく、毎日の引継ぎ、部会での舎生の情報の共有、「思いがふくらむ寄宿舎づくり（教育指導計画）」の作成、個人の生活の様子のもちめ作成、年度末総括会議など多くの時間を使っている。それは寄宿舎指導員が交代勤務であり、職員集団で舎生についての実践を深く共有しておく必要があるためである。

その中で実践課題の1つとして「継続した性に関する教育を行う必要性」が挙げられていた。そのため寄宿舎内では2020年、21年度は「こころとからだを育てる実践」をテーマに、性に関する教育について中心に研修にとりくんできた。研修で学んだことを実践し、振り返り、再度実践していく中で、現在の継続した性に関する教育のとりくみにつながっている。

寄宿舎内での研修と実践の内容を振り返り、今回の報告としたい。

3 2020年度のとりのくみ

2020年度の舎内研修では、夏季休業中の研修会で「子どもたちの『こころとからだ』とどう向き合うか」というテーマで赤木瑞枝校長に講演していただいた。保健体育科の教員として性に関する教育を実践されてきたこと、今後の学校での性に関する教育で求められるもの、大切にしたいことを話された。

(1) 「子どもたちの『こころとからだ』とどう向き合うか」講演内容（抜粋）

① こころとからだの教育の変遷

日本と欧米の性に関する教育の考え方の違い。

日本では性に関することは長い間タブーとされていた。戦後の性教育は「純潔教育」がメインだった。1990年代以降、インターネット、SNS環境の変化も影響し、思春期の子どもたちの性行動の低年齢化、活発化、10代の妊娠中絶、性感染症罹患率の増加など教育の現場でも性教育が一部の教員から全体化した。

欧米では1964年アメリカ性情報評議会が設立され、「人間の性」をセクシャリティという広い概念でとらえるようになった。「セクシャリティとは、人格と人格のふれあいのすべてを包括するような幅の広い概念で、身体の一部としての性器や性行動のほかには相手との人間的なつながりや愛情・友情・思いやり・包容力など、人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある生育環境なども含まれる」と述べられている。また、欧米では2つの考え方に立って性に関する教育が行われている。

ア 望まない妊娠や性感染症、HIVの感染を防ぐ性的節制・禁欲。

イ 性的活動を遅らせるメリットの指導と避妊方法などを包括的に学ばせて自己意思決定を手助けする。

② 学校での性に関する教育の視点

「リプロダクティブ・ヘルス/ライツの概念」1994年国際人口開発会議で提唱

リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは、性や身体のことを自分で決め、守る権利のこと。

ア リプロダクティブ・ヘルスとは、性や子どもを産むことに関するすべてにおいて、身体的にも精神的にも社会的にも良好な状態であること。

イ リプロダクティブ・ライツとは、自分の意思が尊重され、自分の身体に関することを自分自身で決められる権利のこと。

(ア) 性に関する教育は保健体育のみならず、道徳や特別活動など教育全般においてとりくむことが大切であり、教科によって学ぶ領域の調整をする。

(イ) 人間関係についての理解やコミュニケーション能力を前提として、その理解の上で性に関する教育がある。

(ウ) 心身の機能の発達に関する理解や感染症の予防の知識などの理解。

(エ) 理性により行動を制御する力。

(オ) 自分や他者の価値を尊重し相手を思いやる心を醸成する。

③ これからの性に関する教育に求められるもの

性に関する学習を通して「生きる力」を育む。

ア 科学的に正しい性の情報を高校生までに学習する。

イ 「性」は個人に最も密着した「人権」である。

ウ 「性的自己決定能力」を促す学習をする。子どもを「心とからだの主人公」として育てる。

エ 自分と違うさまざまな人と認め合って「共に生きる」力を育む。

④ 性的マイノリティについて

さまざまな性のあり方の中で少数の立場の人のこと。社会の中で約10%程度いると考えられる。性を特別なこととしてではなく、その人の人格の一部としてとらえ一緒に考えることが大切。

⑤ 大切にしたいこと

ア 一人ひとりが心とからだの主体者になる。

自分の心とからだを大切にする（嫌なことは嫌と言う）

相手の心とからだを大切にする（自分に関わる大切な人）

イ わからないことは、子どもたちの話を聞き、一緒に悩み、一緒に学ぶ、相談に乗るというスタンスで関わる。

ウ 保護者・教員間でも話し合っって連携する。

- エ 丁寧に、繰り返し学ぶことが大切。
- オ セルフプレジャーに関わることはプライベートなこと。“1人の時間にすること”というメッセージを伝える。
- カ 子どもたちがこれから先、どのように生きていくかを支える。

⑥ まとめにかえて

「性に関する教育を自分一人で全部できると思わなくてよい。その方がきつとうまくいく。職員集団でとりくんでいくことが大切」だと話された。子どもの話を聞くときには“まずは受け止める”。すぐに解決できなくても「伝えてくれてありがとう」というところからスタートしてもよいのではないか。最終的には、自己決定できる力を支えてあげたい。自己決定できるようになる力を育てたい。性に関する問題は子どもを怒るようなことではない。と締めくくられた。

(2) 実践の様子

① ベストフレンズ（小中学部集団）の様子

研修会を終えた2学期以降に職員間では生と性についての話をとりくみに入れていくことを確認した。また、一緒に生活をする仲間としての意識が高まってきたことで集団での性に関する教育をしやすくなった。

- ア 第1回目は「体を清潔に保つことの大切さについて」意見交流を行い、それぞれが自分のこととして考えるきっかけになった。
 - イ 第2回目は「思春期の心と体の変化について」話をした。全体で話をする前に事前に男性の体からだの変化について話が必要な舎生には、精通や夢精についての知識を持たせるようにした。
 - ウ 第3回目は、「自分のきもち 友だちのきもち」とし、自分の気持ちをわかってもらうこと、友だちの気持ちを理解するにはどうしたらよいか？という内容で話をした。なかなか自分の気持ちを上手に表現できない舎生が多かったが、職員が意図して“何でも話してもいいよ”という雰囲気を作ることで意見が出るようになった。
- 3回の性に関する教育を重ねることで職員からの投げかけに真剣に考え、話し合いをすることができるようになってきて、心の成長につなげることができたと思う。

② アミーゴ（高等部）の様子

男子舎生のみでこの年は、舎生の興味・関心のあるものに合わせつつ、担当職員が伝えたいこと、話しやすい内容で性に関する教育を行うことになった。

- ア 「職員の学生時代の好きな人について」では、YouTubeで好きだったアイドルの動画を示して話をしたり、バレンタインでチョコレートをもらえなかった体験談を紙芝居を使って話したりすることで、話の内容が身近に感じられたようだった。
- イ 二次性徴について語り合う「ここが知りたかった！に答える学びの時間」と題して、高等部卒業までに自分のからだの変化への気づきを促し、自慰（セルフプレジャー）についても伝えておきたかったためにとりくんだ。
- ウ 職員から「娘がいる父親の気持ち」について話をした。
自分が結婚し、子どもをもち、育てたこと。娘が結婚相手を家に連れてきた時の話に、舎生はとても興味をもった。舎生への質問で『娘が結婚相手に選んだ男性はどんな人だったと思うか？「①お金持ちで力持ちの人」「②優しく仕事をまじめにしている人」のどちらの人を選んだと思うか？』という質問では、舎生たちは積極的に①と答えていた。実際には②の優しくまじめな人を選んだことを知ると驚いていた。舎生の自分の価値観とは違う考えがあることを知る良い機会になった。

また、好きな人と付き合いたいという思いがある舎生もいたため、相手も自分もお互いの思いを大事にすることと合わせて、自分の思いを押し付けるような言葉や暴力がDVになることも伝えた。

- エ “自分の人生折れ線グラフ”のとりくみでは、職員が自分の人生を振り返って、グラフ

化したものを示しながら“どのような出来事があったか？”“その時はどんな気持ちだったか？”を話した。舎生たちは職員の話聞き「何歳で結婚したの？」など質問をし、自分の身近なものとして考えられた様子だった。

舎生自身にも折れ線グラフを書いてみるようにとりくむと、今後の人生に夢と希望を持ちグラフは上昇していた。

(3) 課題

2020年度は、職員間で性に関する教育について「まずはできることからやっつけよう」ということで職員のやる気を形にしていくことでとりくみを進めた。舎生たちは、本来なら友だち同士で話すような恋愛話を職員に話すようになり、気持ちを落ち着かせる姿が見られるようになった。

もっと話をしたいと思っている舎生の姿が見えてくることで、継続した性に関する教育の必要性をさらに強く感じることとなり、翌年に課題として残し、引き続きとりくんでいくことを確認した。

4 2021年度のとりくみ

前年度の課題を引き継ぎ、性に関する実践を学ぶため舎内研修会で講師を招いての学習会を行った。事前にアンケートで日ごろからの悩みや疑問に思うこと、講師の先生に質問したいことなどを聞き、充実した研修になるように準備をした。

講師には高等部卒業後の学びの場「ほぼろスクエア」の千住真理子氏に来ていただいた。堺市にて支援学級、支援学校に勤務し、性教育に目覚め実践されてきた。退職後はほぼろスクエアの立ち上げから関わり「こころとからだの学習」(性教育)と「グッドライフ」(進路)の授業を担当。青年たちが「幸せに生きるために学ぶ」2つの授業を行っている。実践豊富な千住氏に「生活をゆたかにする性教育」というテーマで講演していただいた。

(1) 「生活をゆたかにする性教育」講演内容 (抜粋)

①大切にしてほしいこと

- ア どの子にも思春期はやってくる。からだの変化、少し遅れて心の変化がある。
- イ 性は人権。人として幸せになる権利。命の根幹に性がある。
- ウ 自己肯定感を育てる。
- エ 自分で決める、自己決定の力を育てる。
- オ 「快」の体験を「気持ちいいね」という言葉を添えてたくさん積む。
- カ 行って良い行動を提示する。否定の言葉は自己肯定感を下げる。視覚に訴える教材を用意し、ロールプレイを多く持つ。話し合い、男子会、女子会を持つ。

②思春期について

みんなにやってくるもの。3つの出会いがある。

- ア 大人のからだとの出会い
- イ もう一人の自分との出会い
- ウ 好きな人との出会い

③性器タッチとセルフプレジャーについて

言葉で表現できない分、行動で表す。それをどう読み解くかは関わる私たちの仕事である。

「自分のからだはどこを触ってもよい」ことを伝えたいので、場所、時を選べるように。

障がいのある人によっては誰かの見守りや支援が必要な人もいる。支援する人にも支援がいる。

④絵本、教材の紹介

性に関する内容を扱った書籍、男性のからだ、女性のからだの仕組みがわかる手作りエプロンを使った実践などの紹介があった。

⑤まとめ

性について学ぶことは、人権に関わる大切な学習、包括的なセクシャリティ教育である。正しい知識を教えることで自分をコントロールする力になり慎重になる。自分のからだを知り自分のからだの主人公に、自分で自分の生き方を決めていく心の主人公になる。「寝た子をおこすな」ではなく「正しい情報で科学的に起こしていく」ことが大切。

寄宿舎の生活は家でもなく、学校でもなく、異年齢の子どもたちの集団の場。人間関係を作る場である。寄宿舎生活が楽しめることは「誰とでも楽しめる、どこでも寝ることができる子」になる。これは自立への一歩である。もっとたくさんの人に経験させてほしい。寄宿舎でできることはたくさんある。また、寄宿舎での学びの内容を知らせていき理解、協力をしてもらうことも大切である、と話された。



<千住氏の講演の様子・紹介のあった絵本>

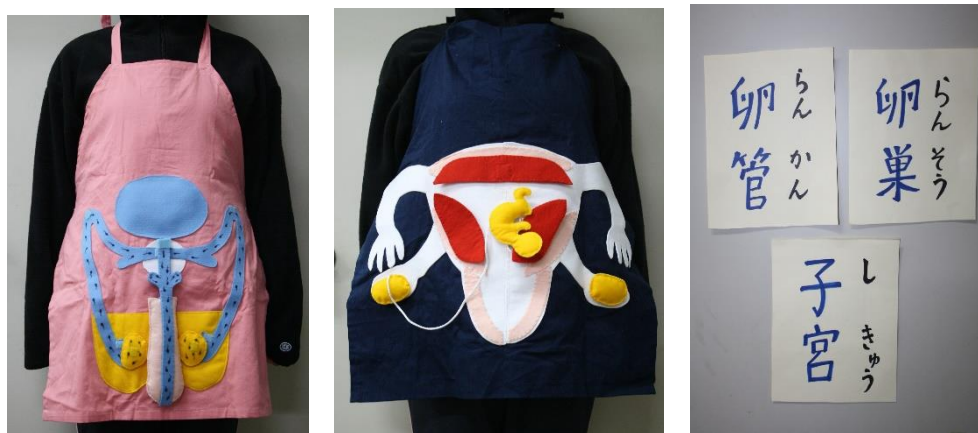
(2) 実践の様子

千住氏の講演を受けて、教材作り、継続した実践をさらに進めていくことになった。

①教材作り

見てわかる教材として、男性のからだ、女性のからだの仕組みがわかる手作りのエプロンを作成した。また、こころとからだの話を行う際には、スライドを用意し、話す内容のポイントが伝わるように工夫した。

事前にプレ発表を行い職員間での確認や意見交流を行い、より良い内容にできるよう作り上げた。



<作成した手作りエプロンと名称カード>

②ベストアミーゴの様子

2021年度は、舎生が減り、部ごとのとりくみではなく、舎生全員で活動することになった。職員が学期ごとに担当が変わる形になったが、性に関するとりくみについては継続的に行うた

め、ベストアミーゴの担当が計画し学期に1回は行うこととした。

ア 1学期「自分を好きになろう」

当時、舎生が興味をもって読んでいた本を活用し、「自分を好きになろう」と題し、「自分のことを好きになるにはどうしたら良いか？」と職員と一緒に考える時間をもった。まずは、自分のことを好きになるためには自分のことを知ることが大切だと話し「自分の得意なこと・苦手なこと」を紙に書いて発表した。自分の得意なことを見つけていく中で、自分の良さに気づき、苦手なことも考え次第で良さにつながっていることを話した。また「ストレスがたまった時にはどのように発散するか？」ということも発表し、それぞれの思いに気づく機会となった。

イ 2学期「女性のからだ」

外見からは見えない女性のからだの仕組みについてエプロンシアターを用いて話をした。具体的な名称はカードを使って舎生にわかりやすいように提示した。正式名称をきちんと教えつつ、説明はできるだけわかりやすいことばを使用するよう心掛けた。月経、妊娠に関する仕組みについても説明し、妊娠中や出産後の家族の生活について意見交流を行った。

舎生からは「へその尾」についての質問や、「赤ちゃんを産む女性は痛いのに、男性は何もないなんてズルい！」というような率直な意見が出されて職員の経験も踏まえて話し合い、有意義な時間となった。

ウ 3学期「男性のからだ」

2学期に女性のからだについて話をしたため、3学期は男性のからだの仕組みについてエプロンシアターとスライドを用いて話をした。大人になるとからだにどんな変化が起こるのか？舎生の意見も汲みながら話を進めた。体の中を前から見た様子がわかるエプロンシアターと、横から見た様子がわかるスライドを準備して具体的に説明したが、舎生によっては体の向きが変わることで混乱し、理解しにくい様子が見られた。近くにいた職員が気づき補足説明を加えることで理解に繋がれるようにした。

1学期から継続しての性に関する話であったため、最後には男女共にからだは大切であること、自分だけでなく友だちや家族のからだも大切にしようと話を終えた。

エ 男子会「おちんちんの洗い方」

3学期の男性のからだについて話をしている際に、職員から舎生へ話したい内容がたくさん出され、時間内に収まらないことが予想された。重複障がい舎生にわかりやすく伝えるため、男子舎生のみで話をしている時間をもつことにし、ベストアミーゴとは別日に男子会を実施した。テーマの設定や内容を精選し、できるだけわかりやすいことばを使い、性器のしくみと性器を清潔にすることの大切さを話した。ベストアミーゴの男性のからだの話をした後日であったため、舎生の気持ちもほぐれており、職員の説明に対して時折意見を言い積極的だった。性器の洗い方については具体的に話げできた。舎生からの感想は「こんな話は女子にしたら怒られるな」と言い、今回は男性だけで話をしたことでよりプライベートに踏み込んだ話になった。

(3) 課題

研修で千住氏から学んだことを生かし、今まで以上に性に関する教育について寄宿舍職員全体でとりくむことができた。プレ発表では意見が活発に出され、職員間でより良い実践を行いたいという全体の合意が進んだ。保護者からも「家庭では性に関する話はしにくいので寄宿舍で話してもらえるのはありがたい」という意見をもらうようになった。保護者にとっても性に関する話は大切であると思いつつ、なかなか話しにくく、難しいと思っていることがわかった。反省では「学期に1回のとりくみでは系統性を持たせるには難しい」という意見もあり、性に関する実践の継続を実践課題として今後もとりくんでいくこととなった。

5 最後に

2年間の研修、実践を振り返り、研修を生かした実践を行うことができていると改めてまとめることができた。系統立てた性に関する教育を実践するにあたって、はじめは職員間で躊躇する意見もあったが、舎生の実態に合わせ職員が無理をしすぎない形で進められたのも継続できる要因になっていると思う。2022年度についても継続した性に関する話は、大切に続けている。

舎生も「こころとからだの話」には興味を持って真剣に参加している。自分なりの表現で自分の気持ちを伝えてもよいこと、友だちの思いも大事であることを学んでいる。その中でこころとからだの成長を感じることができ、日常生活の中でも自分の気持ちを表現することが増えてきている。子どもたちの成長を感じ、豊かな発達には性に関する教育が不可欠なもの実感している。

寄宿舍生活の中では身近な性に関する話題はたくさんあり、とりくみ以外にも日常的に話をしていくことも多いので、今後も研修で学んだことを生かしつつ実践を続けていくことが大切だと感じている。